

油注がれた篡奪者たち⁽¹⁾

坂大 真太郎

BANDAI, Shintaro

目次

序

1. 油注がれた王たちの事例

- 1.1. サウル
- 1.2. ダビデ
- 1.3. ソロモン
- 1.4. ハザエル
- 1.5. イエフ
- 1.6. ヨアシュ
- 1.7. ヨアハズ
- 1.8. アビメレク

2. 共通点と機能

- 2.1. 共通点
- 2.2. 機能

まとめ

序

本論で私は、ヘブライ語(旧約)聖書⁽²⁾における、王候補者⁽¹⁾に対する油注ぎ(塗油)⁽³⁾の儀式について、次の三点を指摘する。(1) 王になるべく油注がれる人物とは、王位獲得競争において拮抗する対抗馬を退けてその地位に就く者たちのことである。(2) それゆえに——当然のこととして——、油注がれる王には必ず対抗馬が存在する。(3) その対抗馬の観点では、油注がれた人物の王位は不法である。

私を知る限り、研究者たちは通常、ヘブライ語聖書に登場する王たちを、油注がれた者とそうでない者とに分類しない。例えば、メシア思想の発展を記述した W. O. E. Oesterley は、その区別を指摘することなく、油注ぎの儀式を王一般に関連づけて、次のように解説する。「名詞の「メシア」（マーシアハ）は、「油注がれた者」と呼ばれる王か、もしくはヤハウェの「メシア」に言及する際に用いられる（サム上 2:10;24:7、11、ハバ 3:13 他⁽⁴⁾）。「その聖別は、預言者、王、そして祭司の役職のためである……」⁽⁵⁾。「しかしながら、その語の使用は預言職との関連においては稀である。対して、王権との関連においては頻繁に現れる⁽⁶⁾」。The *Encyclopedia of Religion*（1987 年版）の「メシアニズム」の項も、マーシアハについて、「……元来は、油を使用した注ぎの儀礼によって聖別された統治権を持つ王を指した。ヘブライ語聖書（旧約）において、マーシアハは常にイスラエルの実際の王への言及で使用される⁽⁷⁾」と解説する。『旧約新約大事典』の「メシア」の項は、「〈終末論的〉救済者」なる概念の解説に傾注し、油注ぎの儀式の参与者である王たちの分類には目もくれない⁽⁸⁾。同書の「油」の項は「……油を注ぐことは王の即位の際の重要な儀式であり……⁽⁹⁾」と説明するものの、やはりその儀式と即位を安易に結び付けており、ヘブライ語聖書の文面上のパターンに関心を払わない。このように、ヘブライ語聖書中の王たちは一般的に即位時に油注ぎの儀式に参加している、との理解が流布しているように見える。本論はそのような説明に対して異論を唱える。油注がれた者についてより厳密な解説を試みるなら、ヘブライ語聖書中の王の内のある者たちは油注ぎの儀式の参加者である、となろう。

本論文で、先述の三つのパターンを見出す方法は次の通りである。ヘブライ語聖書中で油注がれる王たちそれぞれの即位までの過程を個別に再話し、それらの王たちの役職上の人間関係の構造的特徴を記述し、その特徴を油注がれた王たちというカテゴリーにおける共通項とみなす。こうして、ヘブライ語聖書中の油注がれた王たちには共通して、他に王位を申し立てることのできる対抗馬がいる、というパターンを見出す。それ

によって我々は、それら対抗馬から見れば、油注がれた者たちが謀反人、篡奪者であることをも知るだろう。そして本論の終盤では、そのパターンに基づき、社会における王への油注ぎの儀式の機能を説明する。こうして、油注ぎの物語は、儀式という人間の振る舞いの資料の一つへと加工されるだろう。本論は、史実としてのイスラエルの世界の構築には一切寄与しない。私は本論においては史実なるものに一切の関心を示さず、関心はただヘブライ語聖書中の油注ぎの儀式の記述のパターンのみに向けられるからである。

ヘブライ語聖書中の即位物語において油注がれる人物は次の8人である(表1参照)。(1) アビメレク、(2) サウル、(3) ダビデ、(4) ソロモン、(5) ハザエル、(6) イエフ(エヒウ)、(7) ヨアシュ、(8) ヨアハズ⁽¹⁰⁾。油注がれた王として言及される登場人物は、これら8人のみである。既述の通り、現代の聖書解説者たちの中には、油注ぎの儀式が王たち全般によって実行されたと述べる者がいるが、そのような主張は、ヘブライ語聖書中の油注ぎの事例に基づいては申し立てられない⁽¹¹⁾。

表1

	注がれた王	所属部族	父親	対抗馬	注ぐ人
1	アビメレク	マナセ	ギデオン	ヨタム	シケムの住人
2	サウル	ベニヤミン	キシユ	サムエル家系	サムエル
3	ダビデ	ユダ?	エッサイ	サウル家系	サムエル他
4	ソロモン	ユダ?	ダビデ	アドニヤ	ツアドクとナタン
5	ハザエル	アラム	—	ベン・ハダド	エリヤかエリシャ
6	イエフ	—	ニムシ	ヨラム	エリシャ
7	ヨアシュ	ユダ?	ヨアハズ	アタルヤ	ヨヤダ他
8	ヨアハズ	ユダ?	ヨシヤ	ヨヤキム	国の民

本論は上記8人の記事の考察をサウルで始める。ヘブライ語聖書の書物の配列順に従うならば、アビメレクで始めるべきだが、アビメレクの事例では、他の者とは異なり、木々の寓話によって彼の油注ぎが語られているため、他の事例にパターンを見出した上で紹介する方が、読者に

理解されやすいと判断したためである。

1. 油注がれた王たちの事例

1. 1. サウル

「サムエルは油の器を取ってサウルの頭に注ぎ彼に接吻して言った、『主はあなたに油を注いで、あなたをご自分のものである民の君主とされたのです』⁽¹²⁾」。

サウルが油を注がれる時点で、彼には、彼の他に即位の有資格者が複数いる。まず、(1) サムエルが「自分の息子たちをイスラエルのための裁き手として立てていた」⁽¹³⁾ (サム上 8:1)。そもそも (2) サムエル自身が現役の裁き手である (サム上 7:15-17)。王位獲得という観点から登場人物の関係を見れば、サウルにとって、サムエルを含むその一族は有力な対抗馬である。さらにヤハウエがサムエルに対して、「わたしが彼らの王であることを拒絶したのである」と語っているように (サム上 8:7)、このときは (3) ヤハウエがすでにイスラエルの「王」である。また、サウル選出の際に「くじ」が使用されることからわかるように (サム上 10:20-21)、(4) サウル以外にも王に選ばれる可能性を持った者たちがいる。このように、サウルには、彼の他に王の資格を持つ者たちとして、(1) サムエルの息子たちと (2) サムエル本人、(3) ヤハウエ、そして (4) イスラエルの他の部族の者たちが⁽¹⁴⁾いる。サウルはそれらの即位候補者たちを退けてイスラエルを支配する王位に就く。油注がれた王と王の資格を持つ他の者、という対立構造は、この他の7人の油注がれた王たちの物語にも見出せる。

油注がれたサウルであるが、彼の王権に対しては、イスラエルの民の一部が不服を申し立て、「こんな男にわれわれが救えるものか」との声を上げ、王への贈り物を拒否する (サム上 10:27)。他ならぬサウル自身が、自分が王に選ばれることをサムエルにほのめかされるとき、それを訝っ

てこう言う。「わたしはイスラエルのうちでいちばん小さな部族ベニヤミンに属する者、しかもわたしの氏族は、ベニヤミン族のうちでいちばんつまらない氏族なのです」(サム上9:21)。サウルのこの言葉は、自らの王の資格に対する嫌疑を彼自身が自覚していることを表していると言える。他の事例にも見られるように、油注がれた王たちには、常に自らの王としての資格に対するこのような疑念がついて回るのだ。

1.2. ダビデ

「サムエルは油の角を取り、兄たちの前でダビデに油を注いだ⁽¹⁵⁾」。

ベツレヘム人エッサイの息子⁽¹⁶⁾ダビデは、サムエル記上・下において、三度油を注がれている。一度目は、ヤハウエの命を受けたサムエルによって、ベツレヘムの兄たちの前で(サム上16:13)。二度目は、ヘブロンにて、やって来たユダの人々から(サム下2:4)。そして三度目は、エルサレムにて、やって来たイスラエルの長老たちによってである(サム下5:3)。ダビデには、彼の他に即位の要件を満たしていた者たちがいる。まずサウルである。ダビデが一度目に油注がれるときはサウルが在位中であり、それゆえにサムエルは身の危険を感じて、ダビデに油注ぐことを躊躇する(サム上16:2)。二度目の油注ぎのときには、サウルの息子イシュ・ボシエトがいる(サム下2:8)。三度目の油注ぎのときには、王子ヨナタンの息子メフィボシエトがいる(サム下9:6)。このように、ダビデの油注ぎの儀式の際には、その都度、サウル家の血統に連なる者が同時に存在している。

また我々は、サウルの息子ヨナタンもまた、ダビデにとって強力な対抗馬であることを知っている。サウル自身が息子ヨナタンに王位を継がせようとしている⁽¹⁷⁾。サウルとダビデの物語は、サウル没後の王権が本来はヨナタンに帰されるべきことを教えている⁽¹⁸⁾。生前のヨナタンの最後の言葉、「あなたはイスラエルの王となり、わたしはあなたに次ぐ者となる

のだ。そうなることをわたしの父サウルも分かっている」(サム上 23:17)は、サウルの正統な継承者による、ダビデ家繁栄の祈願、ないしはダビデ家への王権移譲の遺言として解すことができる。このようなサムエル記上のヨナタンとダビデの交流の描写によって、読者は、ダビデではなく、ヨナタンこそが元来の即位有資格者であることを悟る。それゆえにヨナタンの戦死の記事は、ダビデの即位物語において重要な構成要素となっている。ダビデにとってはヨナタンもまた有力な対抗馬なのだ。

ベツレヘム人ダビデは、ヘブロンにおける一度目の油注ぎによって、ユダの家に君臨する王となる(サム下 2:1-4)。しかし、その儀式が彼の治世に安泰をもたらすことはない。ダビデはその後、「全イスラエルの王」であるイシュ・ボシェトと王位をかけて争う(サム下 2:7-10)。幸いにもダビデは自らの手を汚さずにイシュ・ボシェトを排除できる(サム下 3:27;4:7)。また、ダビデは、三度目の油注ぎの後、サウルの七人の息子たちを除き去る(サム下 21:8-9)。この一連のサウル家の血統の根絶によって確立したダビデ王権の違法性を、サウル家の残党の一人は次のような言葉で訴える。「出ていけ。血にまみれた者、卑劣な奴。主は、サウルの家のすべての血をお前に返されるのだ。お前はサウルに代わって王となったからだ」(サム下 16:7-8)。ダビデはこの非難を甘んじて受け入れる(サム下 16:10)。サウル王家にとっては、油注がれた王ダビデは謀反人、僭称者、篡奪者、殺戮者である。油注ぎの儀式がそれらの汚名を拭い去ることはない。

1.3. ソロモン

「祭司ツァドクは天幕から油の角を取って来て、ソロモンに油を注いだ。彼らは角笛を吹き鳴らし、民はみな『ソロモン王、万歳』と叫んだ」⁽¹⁹⁾。

ソロモンへの油注ぎの儀式的執行を命じるのは、彼の父ダビデであり

(列上 1:33-34)、実際に注ぐのは預言者ナタンである(列上 1:39)。ソロモンには、ダビデの後継者争いの対抗馬としてアドニヤという兄がいる(列上 1:5)。アドニヤはダビデの四男で、ヘブロン出身であり、生存していたダビデの息子たちの最年長だった(サム下 3:4)。アドニヤはソロモンより一足早く即位を宣言するが(列上 1:5、11)、ダビデはそれを咎めない(列上 1:6)。読者はこれを通して、ダビデがアドニヤの即位を追認していることを知る。⁽²⁰⁾ソロモンが王位継承の認可をダビデからもらうのはその後のことである(列上 1:13)。したがって、アドニヤ側から見れば、ソロモンにダビデの王位を継ぐ資格はない。また、アドニヤは自らの即位がイスラエルの民の総意であることを主張することもできている。⁽²¹⁾

アドニヤの擁立者として、ダビデの右腕の軍司令官ヨアブと、祭司アビアタルがいたが、ソロモンは、アドニヤの殺害後(列上 2:24-25)、ヨアブをも殺害、アビアタルをエルサレムから追放する。その結果、ソロモンの競争相手はいなくなり、彼の王権は確固たるものとなる(列上 2:46)。

アドニヤとの王位獲得競争におけるソロモンは厳しい局面にある。彼は、自らがダビデの血を引いており、ダビデの嫡出子であると主張することに骨を折る。ソロモンの母バト・シェバは元来ヘト人の男の妻であり(サム下 11:3)、もし彼女とダビデの不倫関係の子の死が語られなければ(サム下 12:15)、ソロモンの出自が不明瞭になる可能性がある。バト・シェバとダビデの不倫物語は、ソロモンを、そのような疑惑の目で見られる人物に設定していると言える。⁽²²⁾この設定に調和して、列王記下におけるソロモンは、非正統な後継者であるゆえに「罪人」とみなされることを恐れる人物である(列上 1:21)。ソロモンは父ダビデと同様、その王位の正統性について疑惑の目が向けられる人物である。このような文学的仕掛けによって、列王記下の読者は、油注がれた王ソロモンが、アドニヤとその一派の目に非正統の篡奪者として映っていることを想像できる。

1. 4. ハザエル

「主はエリヤに仰せになった、『お前の来た道に戻り、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注ぎ、アラムの王とせよ』⁽²³⁾」。

列王記上 19 章 9 節以下によれば、ヤハウエはホレブ山上にてエリヤに現れ、ハザエルに油を注いで、彼をアラムの王とするように命じる（列上 19:15⁽²⁴⁾）。我々はその後の記述のどこにもハザエルへの実際の油注ぎの描写を見つけることはできないが、ここでは、エリヤへのヤハウエの命令を額面通りに受け取ることにする。では、油注がれる王ハザエルにも、これまで見てきた事例のように有力な対抗馬がいるだろうか。それはベン・ハダドである。ハザエルが王位に就くためには、ベン・ハダドに死んでもらわねばならない。ハザエルは——故意か過失か——病床に伏しているベン・ハダドの顔に水に浸した布をかぶせ、窒息死させる（列下 8:15）。この結果的な暗殺により、油注がれた王ハザエルは王位篡奪者となり、自身の王朝を開く（列下 13:3）。

1. 5. イエフ (エヒウ)

「若者はイエフの頭に油を注ぎ、彼に言った、『イスラエルの神、主は仰せになる、「わたしはお前に油を注ぎ、主の民、イスラエルの王とする」⁽²⁵⁾』」。

「ニムシの子」として紹介されるイエフは（列下 9:14）、身分としては「軍の隊長たち」（列下 8:5）の一人であり、いかなる王家の血統にも属していない。しかし彼は、エリヤに現れたヤハウエにより、油注がれたイスラエルの王になることが決定される（列上 19:16）。ただし油注ぎを実行に移すのはエリシャである（列下 9:1-2）。エリシャに遣わされた若

い預言者がイエフに油を注いだ後、イエフは、「主君の家来たち」(列下 9:11)に、自分が油を注がれてイスラエルの王に指名されたことを伝える。すると彼らは「イエフは王である」と宣言する(列下 9:11-13)。だがこのとき、イスラエルの王位はアハブ家のヨラムによって占められている(列下 8:16)。したがって、イエフの即位は、アハブ家にとっては謀反である。実際、列王記下はイエフの油注ぎの記事の直後に、次のように記す。「ニムシの子、ヨシャファトの子イエフはヨラムに対して謀反を起こした」(列下 9:14)。

イエフは、ダビデ、ソロモン、ハザエルのごとく、自らの対抗馬を抹殺する(列下 9:24)。襲撃されたヨラムは「裏切りだ」と叫ぶ(列下 9:23)。謀反人、裏切り者となったイエフを、イゼベルもまた「主君殺しのジムリ⁽²⁶⁾」と呼んで非難する(列下 23:31)。イエフ自身も、アハブ家とオムリ家の成員を根絶やしにした後、民の前で自らの蛮行を認めてこう言う。「わたしはわたしの主君に対して謀反を起こし、彼を殺した」(列下 10:9)。こうした過程を経てイエフはイスラエルの王座を手に入れる(列下 10:30)。油注がれた王イエフは、アハブ家にとっては、裏切り者、主君殺し、謀反人である。イエフにとって、油注ぎの儀式がその汚名を拭ってくれることはない。

1.6. ヨアシュ

「人々は王子に油を注いで王と宣言し、手をたたいて『王さま万歳』と叫んだ⁽²⁷⁾」。

ヨアシュは油注ぎの儀式によって、ユダの王となる。列王記下 11 章 12 節によれば、ヨアシュは、祭司ヨヤダや百人隊長たちによって油を注がれる。このヨアシュもまた王位篡奪者である⁽²⁸⁾。彼はアタルヤという女王を殺害してユダの王位を手に入れるからである⁽²⁹⁾。アタルヤは殺される前、衣を裂いて、「反逆だ、反逆だ」と叫ぶ(列下 11:14)。ヨアシュには、す

でに王位についている人物が存在している。アタルヤから見れば、油注がれたヨアシユの王位僭称は反逆行為なのである。こうして我々は、この事例にも、油注がれた者の王位の不法性を見ることができる。

1.7. ヨアハズ

「その国の民はヨシヤの子ヨアハズを選び、彼に油を注いで父の代わりに王とした⁽³⁰⁾」。

ヨアハズの王位継承時についての記事の中に、彼の対抗馬の直接的な言及は見当たらない。したがって、一見すると、ヨアハズによる父ヨシヤからの王位継承は滞りなく達成され、その油注ぎの儀式には、本論がこれまで取り上げている他の7人の王たちの油注ぎのパターンは見られないかのようなのである。しかし、それに続く記述に注意すると、ある視点に立てば、ヨアハズもやはり疑惑の王であることがわかる。

列王記下 23 章 34 節によれば、ヨアハズにはヨヤキム（エルヤキム）という兄弟がいたことが明かされる⁽³¹⁾。ヨアハズの三か月の在位の後、両者の父ヨシヤの殺害者であるファラオ・ネコ（列下 23:30）が、ヨヤキムをエルサレムの王にする（列下 23:34）。他方、かつて油注がれたヨアハズは、ファラオ・ネコによってエルサレムからエジプトに連行される（列下 23:33-34⁽³²⁾）。このように、油注がれた王ヨアハズには、油注ぎの先例にしたがって、一つの王位を取り合う対抗馬がいる。ソロモンに兄弟アドニヤがいるように、ヨアハズには兄弟ヨヤキムがいるのである。しかし、ヨヤキムとその擁立者であるファラオ・ネコから見れば、ヨアハズの王権は不当なものである。こうして、ファラオはヨアハズを廃し、もう一人の有資格者ヨヤキムを立てる。

対抗馬の存否という要素は、ヨアハズの即位物語とヨシヤのそれとの間の相違を説明する。ヨアハズと同様、ヨシヤも「国の民」によって王とされる（列下 21:24）。しかし、ヨアハズが「国の民」によって油注が

れているのに対し(列下23:30)、ヨシヤは「国の民」に油注がれてはいない。この違いは、ヨシヤの方には対抗馬が存在せず、彼の王権が競争や謀反を経て確立しているのではない、という事実から説明できるだけ⁽³³⁾う。ヨシヤには他の即位有資格者が存在しないのである。対して、油注がれたヨアハズには、他の油注がれた王たちと同様、対抗馬——兄弟ヨヤキム——がいる。油注がれた王たちのパターンを見出そうとする我々にとって、ヨアハズの存在は極めて重要である。

1.8. アビメレク

「木々は、油を注いで自分たちの王を立てるために／出かけて行⁽³⁴⁾った」。

アビメレクもまた油注がれた王である。ヘブライ語聖書の書の配列の順序に従えば、彼が、王になるべく最初に油注ぎの儀式に参加する人物である。ただし、その儀式については、油注がれた茨の木の寓話によってほめかされている(士9:15)アビメレクは、ギデオン(別名エルバアル)の息子である。かつてギデオンはイスラエル人から、「あなたが、そしてあなたのご子息、またそのご子息がわたしたちを治めてください」と懇願され、断っている(士8:22-23)。ギデオンには七十人以上の息子たちがおり(士8:30)、アビメレクは、ヨタムを除いたそれら異母兄弟たち全員を抹殺し、王となる(士9:5-6)。アビメレクを擁立したのは母方の氏族である。

アビメレクへの油注ぎの儀式の描写はここにはない。しかし、アビメレクの異母兄弟ヨタムが語る寓話の中で、アビメレクが油注ぎの儀式の参加者であったことが明らかにされる。そこではシケムの頭たちが、「油を注いで自分たちの王を立てるために出かけていった」木々にたとえられている(士9:8)。それらの木々は、茨——アビメレク——に「わたしたちの王になってください」と懇願し(士9:14)、それに対し茨は、「も

し、あなたたちが誠実さをもってわたしに油を注ぎ、自分たちの王とするなら……」と言って、彼らの願いを聞き入れる（士9:15）。

アビメレクの王権奪取の不法性については、ヨタムの演説だけではなく、士師記の叙述も明言している（士9:24）。アビメレクには、彼の他にも王の資格を持つ者たちがたくさんいたが、彼はそれを抹殺する。その不法行為の果てに、彼は——木々の寓話によってほめかされているように——油を注がれ、王位に就く。アビメレクは油注がれた王であるが、出し抜かれた彼の異母兄弟や服属民の目には、その王権は正当なものとしては映らない。アビメレクもまた、対抗馬にとっては謀反人である油注がれた王である。それゆえに、彼はシケムの頭たちによって、報復される（士9:24-25）。

2. 儀式の共通点と機能

2.1. 共通点

ここでは、油注ぎの記事の登場人物たちの中の共通構造を記述する。

八つの事例から明らかのように、王への油注ぎの儀式に関連付けられるのは、油を注ぐ者（たち）と、油注がれる者の二者のみではない。物語の油注がれた王たちには、対抗馬として、彼らの他に王の資格を有する者たちがいる。それを列挙すれば次のようになる。(1) アビメレクには、異母兄弟のヨタムがいる。(2) サウルには、サムエルによってすでに裁き手に任命されていたサムエルの息子たちがいる。あるいはヤハウエとサムエルがいる。(3) ダビデには、サウルと彼の王子ヨナタン、そしてサウルの子孫がいる（サム下2:10;3:6）。(4) ソロモンには、兄弟アドニヤがいる。(5) ハザエルには、ベン・ハダドがいる。(6) イエフには、ヨラムがいる。(7) ヨアシュには、アタルヤがいる。(8) ヨアハズには、兄弟ヨヤキムがいる。油注がれた王たちは、これら対抗馬を一度は退けて王位を獲得する者たちなのである。

ここで注目すべきは、油注がれた王たちが、めいめいの対抗馬の存命中に油を注がれている点である。上の8人のリストの中に、父王の逝去後

に対抗馬もなく穏当に即位するような王は1人も含まれていない。したがって、油注ぎの儀式は、油注がれる人物が、他方の王候補者の対抗者として王権を主張する行為、と言い換えられる。ヘブライ語聖書において、即位儀礼としての油注ぎの行為は、王権獲得をめぐる抗争の物語内にも配置されているのである。したがって我々がこの儀式を理解するためには、それをただちに円滑な王位継承の文脈に置いてはならず、ましてや「旧約聖書では油注ぎの儀式は王の即位に伴っている」などと安易に一般化してもならない。王への油注ぎの儀式の描写は、まずは、互いに張り合う候補者たちの抗争の只中に据えて理解されるべきであろう。

したがって、油注がれた王に張り合う対抗馬の目には、油注がれた王は、王権を主張する資格を持たない者たちとして映っていると想像できる。そのため対抗馬たちは油注がれた者たちを、声高に、反逆者、謀反人、主人殺し、殺戮者、卑劣な者として呼ばわり、場合によっては殺害を企てる。物騒に見えるそれらの描写は、油注がれた王たちがライバル勢力を黙らせるに足る正統性を持ち合わせていないことを示唆している。ヘブライ語聖書では、油注ぎの儀式は、王としての資格を持たない者たちに対して執行されているのだ。

ところで、上述の8人の他に、油注がれたと王とみなし得るヘブライ語聖書の登場人物がもう1人いる。それはキュロスである。イザヤ書はキュロスを「彼の油注がれた者」(私訳)と呼ぶ(イザ45:1)。油を注いだのはヤハウエという人的存在である⁽³³⁾。ただしその呼称が、文字通りの油注ぎの儀式が執行された者を指すのか、それとも、「選ばれし者」(英語の the chosen one に相当)という一般概念を指すのかは定かではない。そのために本論ではキュロスを表1に記載しなかった。しかし、ここであえてこの慣用語を文字通りに受け止めて、キュロスを油注ぎの儀式の演者と仮定するならば、キュロスの即位状況もまた、他の八つの事例に見出せるパターンに当てはまると言える。彼にもまた対抗馬が存在しているのである。それはダビデ家の末裔である。

この解釈は、Boaz Evron 著の *Jewish State or Israeli Nation?* に引用され

ている、後述の Hayim Tadmor の所見によって支持される⁽³⁶⁾。イザヤ書 11 章には、ダビデの父エッサイの「切り株」から萌え出る「一つの芽」への言及があり（イザ 11:1、10）、その人物は、裁き（イザ 11:4）、諸民族を意のままに操り（イザ 11:10）、ヤハウエの民を集めるとされる（イザ 11:11-12）。これは同書 9 章 6 節の「ダビデの王座とその王国は、公正と正義によって立てられ、今よりとこしえまで支えられる」との予期ないしは願望と合致する情景である。しかし、同書 45 章 1 節において、その期待された情景を達成する人物は、エッサイから萌え出るダビデの末裔ではなく、どこの馬の骨とも知れぬキュロスである（イザ 44:28）。イザヤ 11 章と同書 45 章の対比、つまり、ダビデの血統からキュロスへの王位交代劇について、H. Tadmor は次のような所見を述べる。

第二の預言（筆者注：通例イザヤ書 40-55 章とされる「第二イザヤ」を指す）において、その預言者は「メシア」（「油注がれた」の意）という語を用いている。これはそれ以前では、サウルや主としてダビデといったイスラエル王国の建国者たちにのみ用いられた語である。……よそ者の王が「メシア」と呼ばれることは我々には理解しがたい。その呼称は、同時代の預言者たちによって、ダビデの末裔にすら適用されていないのである。第二イザヤの考えにおいては「神の油注がれた者」であるキュロスが重要な役割を演じており、そこでは「ダビデの子」に居場所はない。第一神殿の預言者たちにとって、神殿とエルサレムとダビデ家が不可分な統一体を構成していたが、それに反し、この慰めの預言者（筆者注：第二イザヤの著者）は、それら先立つ預言者たちによる、来たる「エッサイの切り株の新芽」（イザ 11:1）の未来図に当てはまる王朝とその崇高な役割を無視している、と言える。この預言者は、ダビデ家の王国の再興を見越さない。彼にとって、エルサレムを再建し、人々をバビロン流刑から故国に帰還させるのは、他の誰でもなく、キュロスなのである。⁽³⁷⁾

ここで H. Tadmor が指摘しているのは、イザヤ書 45 章 1 節のキュロスが、同書 11 章のダビデの末裔の「居場所」を無くしている、ということである。この指摘を、他の油注がれた王たちのパターンに則して言い換えるならば、キュロスはダビデの末裔という対抗馬を押し退けている、ということになる。ヘブライ語聖書中の他の 8 人の油注がれた王たちの物語を知る我々は、イザヤ書 45 章 1 節でキュロスが油注がれているのを見て、彼の対抗馬を突き止めたくなるかもしれないが、例に漏れず、キュロスにはダビデの末裔という対抗馬が存在しているのである。イザヤ 45 章 1 節は、キュロスへの油注ぎを通して、ダビデ家の王権喪失を描いている。したがって、キュロスは篡奪者の一人に数えられる。このように、イザヤ書 45 章 1 節のキュロスへの油注ぎの物語もまた、油注がれた王には彼の他に同一の王権を主張できる競争相手が存在する、とのパターンを我々が認識する助けとなる。

2. 2. 機能

以上で明らかにしたパターンを踏まえて、我々は、ヘブライ語聖書における油注ぎの儀式を、何を する 行為と言い換えられるだろうか。ヘブライ語聖書の登場人物たちは、油注ぎの儀式を通して何を している、と言えるだろうか。言い換えると、我々は油注ぎの儀式をいかなる行為として 理解できる だろうか。単に「預言者や祭司が新王の頭にオリーブ油を注ぐ行為である」と記述するだけでは、我々は油注ぎの儀式を理解したことにはならない。それでは、その儀式は私たちの理解の埒外にとどまったままである。我々は、特定の現象を一般化しなければ、それを理解することはできない。私は油注ぎの儀式を議論の一形態とみなし、次のように説明することができると思う。

まず、その儀式は、油注がれた者の王としての資格を問題にし、物語の登場人物たちの間に論争を引き起こすということである。つまり、その儀式の当事者たちは、その儀式を通して、その王がある面では資格不十分であることを認識する。したがって同時に彼らは、正統で合法的な王位

継承とは何かを知っているということをも認識する。さらに言えば、油注ぎの儀式によって、当事者たちは、「王とは何か」を議論する機会を獲得するのである。この論争の発動に先立って、油注ぎの儀式は、登場人物たちの中に王権をめぐる二つの陣営を形成する。いわば、それは社会を分断するのである。

8人の王たちの物語において、油注ぎの儀式が即位争いに解決をもたらしていないことに注目したい。たとえ対抗馬が根絶やしにされても、即位中の油注がれた王の権利と資格をめぐる論争は、その他の登場人物たちによって引き継がれる。その儀式の遂行によって、油注がれた王の正統性への嫌疑が見えなくされることはない。たとえば、サウルとダビデは油注がれた後も、民から王の資格を問われる。イエフは裏切り者、主人殺しと非難される。油注ぎの儀式は、対抗馬側の異議申し立てを封殺することはない。むしろそれは、油注がれた者の王権が疑わしいものであることを人々に気づかせる。油注ぎは、油注がれた王の他に、別の王候補者がいること、ないしはいたことを教える。この儀式は、論争を覆い隠すのでも解決するのでもなく、むしろ暴露する。事実、我々は、油注ぎの儀式のパターンを見出すことによって、即位した王の拮抗する競争相手の存在を知ることができる。ヘブライ語聖書の物語では、ある人物に油注がれるのをきっかけとして、登場人物たち間で歓喜、戦争、争い、陰謀が発動する。油注ぎの儀式は、登場人物たちの社会を波立たせる。したがって、油注ぎは、平穩無事に王位を継承したい者が、迂闊に手を出すべき儀式ではないのである。

まとめ

ヘブライ語聖書中で油注ぎの儀式の実行者である王には、必ず対抗馬が伴っている。王権獲得の抗争の中で行なわれる油注ぎの儀式は、その物語の登場人物たちに、振る舞いの決定、選択を迫る。それは彼らに、彼らが属する共同体内の意見と立場の多様性を教える。誰が彼らの社会の主導者であるかを議論することを彼らに迫る。王の資格者を取り囲む

人々の間に、承認だけではなく否認もあること、合意だけではなく紛糾もあることを教える。この儀式は、ある王権をめぐる人々の態度の多様性を視覚化する。それは、彼らの社会の運営が一筋縄ではいかないことを教える。油注ぎの儀式は、社会に対する人々の強い関心の下に執行されるのである。

こうして私たちは、社会における儀礼の機能の事例を、ヘブライ語聖書に見出すことができる。油注ぎという特定の振る舞いを、儀式というより一般的なカテゴリーに入れることにより、油注ぎについての記述を含むヘブライ語聖書は、儀式についての資料へと加工される。学問において資料の加工は必要不可欠であると私は考える。資料を加工することによって、我々はその資料を理解の範疇内に収めることができるからである。

注

- (1) 儀式のうち、とりわけヘブライ語聖書中の油注ぎ(塗油)に注目する本論文は、(1)ヘブライ語聖書を資料とし、さらにその中の(2)儀式に関する記述に注目するゆえに、宗教史学の領域に属する。
- (2) ヘブライ語聖書本文の底本は、*Biblia Hebraica Stuttgartensia* (Deutsche Bibelgesellschaft)の第5版(1997年)である。聖書の日本語訳文は『聖書——フランシスコ会聖書研究所訳注』(サンパウロ、2013年)からの引用である。書名の略号はフランシスコ会訳にならう。引用文中の「/」は原著での改行を意味する。
- (3) ヘブライ語聖書中の王に対する油注ぎの儀式は、「(油などを)塗る」という行為を示す動詞「マーシャハ」(カル形)によって描写される。ヘブライ語聖書においてこの行為が儀式化される場合、それには同一カテゴリー内にある、特定の個をその他から区別する機能がある。物体への塗油は、石柱(創31:13)、祭壇(出29:36)、その他の祭儀用具に対しても行なわれる(出40:9-11、レビ8:11)。人物としては、大祭司アロン(出29:7)および彼の息子たち(出28:41;40:15)、また、預言者が

対象となる（列上 19:16）。王たちがそうであるように、大祭司職に就く者全員が油注ぎの儀式の演者ではないことに注意したい。出エジプト記 40 章 15 節では、アロンの息子たちのみへの油注ぎの儀式が、彼らの後裔の祭司職を保証しているのであり、彼らの末裔までもが代々その儀式の演者になるとは規定されていない。

- (4) W. O. E. Oesterley, *The Evolution of the Messianic Idea: A Study in Comparative Religion* (Sir Isaac Pitman and Sons, 1908), 193.
- (5) W. O. E. Oesterley, 191.
- (6) W. O. E. Oesterley, 192.
- (7) H. Ringgren, “Messianism” in *The Encyclopedia of Religion* 9, ed. M. Eliade (New York: Macmillan, 1987), 469.
- (8) A. S. van der Woude、土田清、山我哲雄「メシア」『旧約新約聖書大事典』（教文館、1989 年）、1167–1170 頁。
- (9) E. Segelberg、山形孝夫「油」『旧約新約聖書大事典』（教文館、1989 年）、62 頁。
- (10) ゼカリヤ 4 章 14 節は「油の息子たち」に言及する。しかし、たとえそれがゼルバベルとヨシュアを指すとしても、それを油注がれた者たちとただちに解すことはできない（ゼカ 3:6;4:9）。したがって本論では、これを油注がれた者たちへの言及とはみなさない。
- (11) 例えば、レハブアム、ヤロブアム、アハブ、アハズ、ヨシヤ、ヒゼキヤ、センナケリブなどが油注がれている記述を、我々はヘブライ語聖書中に見出すことはできない。
- (12) サムエル記上 10 章 1 節。
- (13) 私訳。
- (14) このような事情のゆえか、サムエルは、「イスラエルの長老たち」が彼に「わたしたちを裁き治める王を与えてください」と嘆願するとき、それに不快感を示す（サム上 8:6）。
- (15) サムエル記上 16 章 13 節。
- (16) サムエル記上・下において、ダビデの父は「ベツレヘムのエッサイ」として言及され（サム上 16:1、18 参照）、ダビデ自身は「エッサイの子」または「エフラタ人」と呼ばれる（サム上 17:12）。ダビデはイスラエル

人としては描かれていない。これは、サウルが、イスラエル（人）と呼ばれる人的集団に属した者としてイスラエルを支配することと対照的である（サム上 18:16 他）。そのため、ダビデは在位中に一人のベニヤミン人から、「われわれはダビデとともに分かち合うものはなく、エッサイの子とともに継ぐものは何もない。イスラエルよ、各々その天幕に帰れ」（サム下 20:1）と野次られる。「反ダビデ勢力は、彼が外人であったと主張していたに違いない」(B. Halpern, *David's Secret Demons: Messiah, Murderer, Traitor, King* (Michigan: Eerdmans, 2001), 275)。

- (17) サウルはヨナタンに向かって、「エッサイの息子が地上に生きているかぎり、お前は、お前の王国を立てることはないのだ。……あれは死ななければならない」と語る（サム上 20:31）。
- (18) 読者に提示される王位継承のこの原則は、サムエル記上 20 章のヨナタンのダビデに対する誓いと請願の言葉がこの物語に配置されるべき理由と解される。ヨナタンがダビデに対して厚い好意を示し、反対に、ダビデがヨナタンを愛したとされるのは（サム下 1:26）、ヨナタンが本来のイスラエル王位継承者であるとの原則があるからである。
- (19) 列王記上 1 章 39 節。
- (20) ソロモンの支援者であるナタンは、直接ダビデに、「あなたは『アドニヤがわたしの跡を継いで王となり、わたしの座につく』と言われたに違いありません」と問い詰めるが、ダビデはそれを否定しない（列上 1:24-27）。
- (21) 「ご存じのように、王位はまさしくわたしのもので、イスラエルの民もみな、わたしが王になることを期待していました」（列上 2:15）。
- (22) ダビデの不倫物語の背後には、ソロモンはダビデの嫡出子ではなかったとの嫌疑がある、との説については、B. Halpern, 404-406 を参照。
- (23) 列王記上 19 章 15 節。
- (24) アモス書は、ハザエルがベン・ハダドと並んでダマスコの王であったと述べる（アモ 1:4-5）。
- (25) 列王記上 9 章 6 節。歴代誌下 22 章 8 節。
- (26) 出自不明のジムリは、イスラエルの王エラを暗殺し、王家の成員を皆殺しにして王位に就く（列上 16:8-14）。ただし彼に油が注がれたという記述はない。この事例は、篡奪者の物語に油注ぎの儀式的描写が必ずしも

必要とされないことを示している。

- (27) 列王記下 11 章 12 節。
- (28) とはいえ、ヨアシュは油注がれるとき、まだ7歳である（列下 11:4）。この篡奪劇を主導するのは祭司ヨヤダと神殿の護衛兵たち、そして「国の民」である。
- (29) 列王記下の物語によると、アタルヤは、オムリの娘（孫娘？）で（列下 8:26）、イエフによって、息子であるユダの王アハズヤを殺される（列下 9:27）。アハズヤの死後はアタルヤがユダを統治する（列下 11:3）。アタルヤは息子アハズヤの血筋を根絶やしにしようとし、アハズヤの子であるヨアシュもその標的になるが、彼は神殿に匿われる（列下 11:2）。
- (30) 列王記下 23 章 30 節。
- (31) ヨヤキムは、歴代誌下 35 章 36 節によれば、ヨアハズの兄である。
- (32) ヨアハズについてのこの物語は、かつてヨアハズに油を注いだ「その国の民」がヨヤキムによって租税を課される、との結末で締めくくられる（列下 23:35）。
- (33) たしかにヨシヤの父アモンは、家臣の謀反によって命を落としている（列下 21:23）。しかし、物語上はヨシヤ王も「国の民」もそれに加担しておらず、むしろ「国の民」はアモンの謀反人を始末している（列下 21:24）。つまりヨシヤが反逆者や謀反人として非難されるいわれはなかったのである。
- (34) 士師記 9 章 8 節。
- (35) ヤハウエの様態や来歴について議論の余地があるが、少なくとも人語を話す存在として描かれているため、ここでは「人」の範疇に入れる。
- (36) H. Tadmor, “Ymei Shivat Tsiyon” (The Period of the Return to Zion) in *Shavit*, vol. 2, p. 253. 筆者は原著を未読（後注 37 を参照）。
- (37) B. Evron, *Jewish State or Israeli Nation?* (Indianapolis: Indiana University Press, 1995), 17.

（立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学
ばんだい・しんたろう）